おまえざきの人 きらり輝く人

海外に通用するお茶作りで日本一に

増田剛巳さん

PROFILE
ますだ　つよみ（62・上朝比奈）
株式会社やまま満寿多園代表。地元の小学生の手摘み体験や工場見学にも力を入れている。

日本一の天皇杯に輝く

7月の全国農業コンクールで農林水産大臣賞を受賞し、ことしの農林水産祭で市内初となる最高賞の天皇杯に輝いたやまま満寿多園。生産・加工・販売を地元農家と連携し、緑茶を海外へ輸出する取り組みを20年以上も前に始めたことなどが評価された。同月に開かれた第43回関東ブロック茶の共進会（深蒸し煎茶の部）では、お茶の品質でも農林水産大臣賞に輝き、代表の増田剛巳さんは「喜びとともに責任の重さを感じる」と語った。

お茶を自らの手で届けたい

「昔は、ほとんどの茶農家では生産したお茶を荒茶へ加工するまでで、自分で売ることはなかった。自分のお茶に自信を持ち、自らお客さんに届けたかった」と話す増田さんは、生産から販売まで一貫して行うため、25歳で「やまま満寿多園」を立ち上げた。

しかし、販売経験が乏しく無名だった増田さんのお茶は、全く売れなかった。頭を悩ませる日々が続いていたとき、知人に「北海道でお茶を売ってみないか」と声を掛けられ、そこでの販売がきっかけとなり、紹介や口コミで徐々に販売量が増加した。

販売が軌道に乗り始めて10年ほどたったころ、アメリカでの販売チャンスが舞い込んできた。「戸惑ったけれど、うちのお茶を飲んでもらえるなら挑戦したい」との一心で輸出を開始した。

ヨーロッパや台湾などさまざまな国へ緑茶が流通し始めた矢先、東日本大震災が発生。風評被害で輸出量は激減した。増田さんは世界中を飛び回って日本茶の信頼回復に努め、4年9カ月が過ぎた今では27の国と地域に輸出が拡大した。

日本の緑茶を味わって

「食文化の変化とともに日本人のお茶離れが進んでいるのが残念」と話す増田さん。「日本の伝統であり健康効果がある緑茶を、日本人はもちろん、世界中の人にも飲んでほしい。今後も地域に貢献しながら、お茶作りを続けていきたい」と笑顔で語った。

御前崎の茶業のさらなる発展に期待したい。